

東海伝統工芸展 陶芸部門総評

愛知県陶磁美術館 総長・町田市立博物館 総長

伊藤嘉章

第56回東海伝統工芸展、陶芸部門の応募者は71名、特待5名（審査4名、招待1名）、作品数は87作品＋5作品。これは昨年より10点減ということでした。年代別では50～54歳が11人と最も多く、その一方で30～39歳は1人のみでした。20～29歳が5名であったことは今後に期待できますが、若い世代に公募展の意味とその意義を伝えていく必要を強く感じました。二次審査では他分野の審査委員が加わります。その意味は伝統工芸として一定の水準にあるかが見られるということです。本展の二次審査でも同様に、完成度の高さが求められます。

その回の傾向が現れるのが受賞作品です。陶芸は8つの賞の内の4賞と、奨励賞1賞を受賞しました。第二位の東海伝統工芸展賞が清水潤さんの「萬古渋色線刻文鉢」です。黒の中に線刻が加えられ、二つのトーンの黒から成る世界で知られる清水潤さんの作品。そこに新たに作品名称にある「渋色」という表現が加わりました。焼成にさらなる工夫を重ねることで生れた渋色が活きており、本作ではより面的な広がりを見せています。続いて第四位にあたる岐阜県知事賞が前田正剛さんの「鉄絵掛分釉描大皿「花筏」」です。黒くて大きく、本当に平たい大皿。その造形は独特です。水面をイメージして生まれた造形、水中では金魚が泳ぎ、水面には桜の花びらが漂っています。そして円形の波紋が三つひろがっていく…。その造形は、まさにこの世界を表すためのものです。描くこと、それが前田さんであったのですが、この作品では造形そのものまでが描くことになっている。これもまた新たな挑戦です。

名古屋市長賞受賞が梅本孝征さんの「色絵流加彩片身替わり鉢」です。梅本さんが陶芸の柱とされている流れる加彩。その技を主体としながら片身替わりという桃山陶以来の意匠への挑戦でした。流れる色釉でありながら面分

割大胆な面分割、造形を一気に展開することでこの作品は生まれました。素地を切り取り、貼り合わせる。そこに段差がつけられ片身替わりの意匠が成立する。新しい表現の世界がここに始まっているのです。

以上の三作品は、新たな踏み出しが強く感じられ、完成度も高い作品として評価されました。挑戦が常に表現として強く現れなければならないということではないというのが、NHK 名古屋放送局長賞を受賞したの小枝真人の「染付金魚鉢」から見えてきます。これまでの作品で器の内外面に描くことで立体と絵という点で挑戦が行ってきたのが、今回はあえて器の内側にのみ金魚を描く。そうした中で奥行きを生み出し、新しい表現となりうるのかを追求することを作者が意識することで生れた作品です。奨励賞は、今回最年少の入選者でもある佐藤颯真さんの「色絵大鉢—明日へ—」です。ゆったりと挽き上げられた大鉢の見込みに描かれた世界は、内に向かって引きずり込まれるような世界は、実に様々な技法を用いています。絵付の完成度、これにこれから造形がどう関わっていくのかが楽しみです。

支部展では自身の課題への挑戦が重要です。その挑戦を受けて本展に向けての制作があり、作品として完成されていく。受賞作品には、そうした挑みが強く現れていました。研究会に参加された方には「何を意識して作られたのか」を必ずお聞きしました。審査委員への「どうしたらよいでしょう」という問いよりも、作り手が何を意識して作ったかを明確にすること、それがどこまでできたのか、足りなかったのかを聞きました。それが次につながると思ったからです。

最後に、展覧会での新しい試みには嬉しい驚きを感じました。受賞作品に作家のコメントが添えられていたのです。工芸展を見る人にとって、そうしたコメントは作品理解、作品を楽しむための扉を広く開けてくれるものです。もう一方で、作り手自身にとって、何を考えて作ったかを記すことは、確実に次の作品の制作に大きな一歩をもたらすと思うからです。